

# 文化

## 人物、信仰の交流史をみる

加藤 民夫

「ももさだ」は、現代では雄物川左岸の新屋地区一帯を指す呼び名として定着している。秋田公立美術大学や大森山動物園、西部市民サービスセンター(ウェスター)、伝統ある醸造業、ガラス工房など住民の施設が集積し、活気ある地域である。活気の背景には、この地に住む人々の進取の気風、さらには、その気風を生んだ歴史があると思う。

筆者はかつて「秋田市史」中世編の執筆にあたり、この地の歴史を伝える諸資料を見る機会に恵まれた。そして気風の根底には、飛び砂や河川の氾濫を克服しつつ、北陸海運による文物の吸収と流浪者の受け入れなどによって培われた、新しい事態への対応力があると確信した。

「ももさだ」の名が文献に登場するのは、「吾妻鏡」文治6(1190)年1月の条「毛々左田」が初めてである。続いて鎌倉御家人橋公業が「豊善、百三段」の地頭職を得たことの記事が出てくる。一般に中世の郷は、昭和初期の3、4方町村をまとめたほどの広さがあり、百三段郷の領域は勝平・新屋・浜田・桂根・長浜あたりまでとみなしてよい。

この領域と深く関わるのは、丘陵をまたいで雄物川の左岸に連なる石田坂から居使、前郷、さらに小山、八田までの諸村である。ここは大きく豊善郷に統括されていた。

百三段郷と豊善郷は海浜と農村という対照的な生活圏ではあるが、早くから桂根と石田坂、また長浜と前郷の間は道路が通っており(図参照)、海産物と農作物の売買が成立していた。百三段郷の市場の盛んなさまは、矢島領から産物が子

# 進取の風が吹く「ももさだ」

吉川河口を経由して百三段の市場で売りさばかれていたという記録(「矢島十二頭記」)からも確認できる。

とりわけ塩は大きな意味を持っている。長浜の本敬寺に伝わる略縁起は、北陸加賀の一向宗徒が追われて勝平の浦にたどり着いたが、やがて飛び砂で暮らしにくくなり、南の新屋や長浜に移転し、そこで本格的な製塩の方法を現地の住民に伝授したと記している。従来、当地の製塩は効率の悪い釜焚であったが、漉したり複数の釜を使うなど上方の製法に改良したところ生産量が格段に増大したのである。

ちなみに百三段の製塩は江戸期も盛んであった。新屋村の佐々木門十郎は「家事要記」で、祖父が仙台から塩焚師を招き百姓らに技術を学ばせ、2万俵の収穫を得たと述べている。ここにも百三段人の進取の気風が読み取れる。

百三段郷と豊善郷は深い関わりをもつ一方で、政治的には百三段が由利赤尾津

氏の配下となった小野氏が領有し、豊善郷は安東氏の支配下だったため対立関係にあった。しかし住民たちは経済交流を続け、両陣営に抜かりなく奉仕して町の繁栄を維持したのである。

住民を支えた精神的支柱は何であったろうか。それを解く鍵として二つの要因が考えられる。

第一は北陸へ通じる街道と日本海によって流入する人と物資である。例えば京阪地方からの日用衣料品や書画骨董の受容であり、先述の一向宗徒の移住である。第二は信仰である。11世紀以来、日本海を北上してきた天台宗延暦寺の護法神である日吉信仰がこの地に伝わり、日吉神社(今は「ひよし」と称する)が創建されると、人々の絶大な信心を得た。加えて16世紀に一向宗徒の流入が顕著となり、それまでの信仰に変化を及ぼした。ここで注目したいのは、百三段郷の対応である。小野筑後は明応年中(15世紀末)に新屋に龍光寺を建立して菩提寺とし、二千五百刈り(25石に相当)を寄進、曹洞宗の布教が始まっていた。そこへ一

かとう・たみお 1937年生まれ。元県立博物館副館長。「秋田市史」中世通史編と近世通史編を分担執筆。秋田市。

向宗徒が大勢流入し、龍光寺の敷地内に忠尊寺を設けた。これによって敷地に狭さを感じた龍光寺は、一向宗徒らに土地を譲ることとなる。

古来の日吉(山王)信仰に加え、仏教宗派が新たに信者を募る中で、百三段の人々は冷静に対応したのである。人や物の交流に、前向きに対処する習慣が身につけていた結果と考えたい。

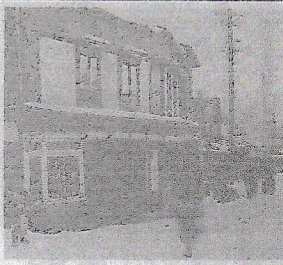
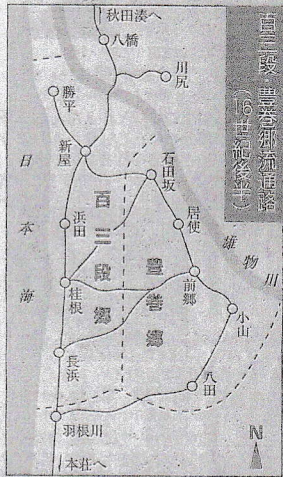
その後、領主の小野氏が後退し、龍光寺は支援者を失うことになる。だが信者らに支えられて活動を続け、秋田領に編入されてからは天徳寺を本寺に仰ぎ、天龍寺と名を改めて移転、現在地(新屋表町)に存続している。

一方の忠尊寺(新屋栗田町)は伽藍を整え現在に至っている。その後、百三段は赤尾津領から最上氏の支配、そして佐竹氏領へと目まぐるしい変動にさらされた。それでも領民は動揺することなく、清らかな湧き水を使い醸造業を盛んにし、羽越街道の宿場町としての繁栄を保ち戦国社会を乗り切った。



森川 源三郎  
1845(弘化2)～  
1926(大正15)年

昭和10年代の  
秋田市新屋表町。にぎわい  
ぶりが分かる



近世になると秋田藩の林取立役栗田定之丞が、強風による飛び砂への対策に乗り出した。これに住民も積極的に協力し、歳月を経て見事な砂防林を完成させた。

さらに幕末には、異国船防衛のための砲台が置かれ、新家(多額の献金によって武士身分を得た農民・町人)が海岸防備のために移住した。明治期には新屋出身の篤農家森川源三郎が農事改良で活躍する。

このように中世以来、底深く流れる百三段郷の先進的潮流が継承され、現在の文化形成に至っていると考える。